慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『かやくき物語』の生成 : 『うつほ物語』木曽本系統の伝流
Sub Title	
Author	髙橋, 諒(Takahashi, Ryo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2015
Jtitle	三田國文 No.60 (2015. 12) ,p.1- 16
JaLC DOI	10.14991/002.20151200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20151200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『かやくき物語』の生成

――『うつほ物語』木曽本系統の伝流――

髙橋諒

はじめに

『かやくき物語』と題された写本がある。内容は、『うつほ物語』楼の上上・下巻にあたるが、外題の「かやくき」と、内容上の接点がないという不可思議な写本である。

「かやくき（鷦）」とは、イワヒバリ科の鳥「かやくぐり（茅潜）」の異名である。『為忠家後度百首』[1]には、

色々の花にまぎるるかやくきをかるとて野べに暮しつる哉

（雑十五首・小鷹狩・七四五）

と、さまざまな草花にまぎれて歩くかやくきの姿が詠まれる。また、『千五百番歌合』の一二七八番の判詞には、「まがきのもとのかやくき」とある。

千二百七十八番　左　　前権僧正

ねざめするわがたまくらの秋のつゆははるもおきけりいつもおきけり

（二五五四）

右　　雅経

おもひかねつれなきなかにまつ事はくらせるよひの夢のかよひぢ

（二五五五）

左歌、上句にねざめの秋のつゆは春もおきけりと侍るに、秋のみならずとはきこえ侍るに、又いつもおきけりと侍るこそ思ひがたく侍れ、第五句はべるべくは春もおきけりと侍らずともきこえ侍りなんと申すべきに、惣につけ別につけて、たしかに申しおく事も侍らば、あしからずもや侍るらん

右歌、こしの句の、まつことはといへるぞ、あまりにただ詞にて侍れど、下句など宜しく侍るめり、勝負はおろかなる心難及はべり、まがきのもとのかやくき、あまつそらの雲にかけりがたし、井のうちのかはづ、わたつみのなみをしのぐにあたはざるをや

「かやくぐり（茅潜）」の名の通り、草むらや花々、籬などの下に隠れる習性を持つ鳥であることが分かる。このことは、『惺窩和歌集』巻五の「寄長嘯子」の長大な詞書の中で、「かやくき」と「籬」がセットで扱われていることからも、うかがえる。

寄長嘯子

かやくきの籬にかけるよるべもあさはかに、にほの浮

巣のたゞよふいとなみもあだなれど、さばかりだになくて、かくやつ〳〵しき身にしもありけるかなや、

（中略）つみゆるべたまひてんとよ

君がすむ山の田ぶせにふせいほを我もむすばなちぎりたがふなゆめ　（九八）

にごるさけにこらぬ人とよしゑやしゑひなきしつゝわらはなむやぞ　（九九）

以上のことから、「かやくき物語」という書名には、「さまざまな物語（あるいは巻）の中に隠れた一つの物語」といった意があるものと推察される。中村忠行が、この書名を示し、「系統未勘本」と位置づけて[2]以来、高橋亨が『かやくき物語』の名を挙げ、存在を示すことはあった[3]が、具体的にどのような素性の写本であるのか、論じられてこなかった。

本稿は、『うつほ物語』の伝本として、これまで本文系統を未勘とされてきた『かやくき物語』に関して報告をするとともに、『かやくき物語』が、どのような伝来をもって成立したのか、明らかにすることを目的とする。

一、『かやくき物語』の諸本と書誌

『かやくき物語』の現存諸本は、現在まで調査した限りで、五本ある。これらの書誌を記す。〔　〕内は略称である。便宜上、一面行数によって、諸本を区分けした。

【1】一〇行本

東北大学附属図書館狩野文庫蔵写本〔狩野本〕

【書写年代】江戸中期。

【装　訂】袋綴。

【巻冊数】二巻二冊。

【寸　法】上下巻ともに、縦二三・七糎、横一六・六糎。

【表　紙】表表紙は、茶色布目型押表紙。裏表紙は、黄色卍型繋表紙。

【料　紙】楮紙。

【外　題】表紙左肩書題簽（縦一五・一糎、横三・一糎）に、「かやくき物語　上（下）」とある。上巻は灰色題簽、下巻は水色題簽。

【内　題】なし。

【丁　数】（上巻）八二丁、（下巻）九九丁、全一八一丁。

【一面行数】一〇行。一行一八字程度。字面高さは、上・下巻ともに、一八・八糎。和歌は二字下げで始まるが、一字又は三字下げが間々あり、歌末は、地の文にそのまま繋がる形式。

【奥　書】なし。

【蔵書印】前見返し中央に、「東北帝／国大学／図書印」（朱陽方）。上巻一丁オモテ右肩に、「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ以テ購入セル文学博士狩野亨吉氏旧蔵書」（陽朱長方双枠）。上巻一丁オモテ右下に、「阿波国文庫」・「不忍文庫」（陽朱長方双枠）。上巻後見返し・下巻九九丁ウラの中央下に、「阿波国文庫」（陽朱長方）。

慶應義塾大学図書館蔵写本〔慶大本〕

【書写年代】江戸中期。
【装　訂】袋綴。
【巻冊数】二巻二冊（但し、上巻は佐方宗佐の注した『かやくき抄』。）
【寸　法】（下巻）縦二四・二糎、横一六・九糎。
【表　紙】（下巻）茶色桜花散らし表紙。
【料　紙】楮紙。
【外　題】（下巻）表紙左肩書題簽（縦一七・五糎、横三・八糎）に、「かやくき物語　〔下〕」とある（亀甲括弧は擦跡より推定）。
【内　題】遊紙左肩に「かやくき物語　下」とある。
【丁　数】（下巻）九九丁、全一〇二丁（うち遊紙三丁）。
【一面行数】（下巻）一〇行。一行一七字程度。字面高さは、一九・四糎。和歌は二字下げで始まるが、歌末は、地の文にそのまま繋がる形式。
【奥　書】なし。
【蔵書印】遊紙の右下に蔵書印と思われる跡があるが、切り取られている。
【備　考】上巻は、『かやくき抄』で、『かやくき物語』とは全くの別物である。上巻を佚した『かやくき物語』下巻に、「かやくき」の書名に引かれて、後人により『かやくき抄』が上巻に取り合わせられたのであろう。従って、本稿では、下巻を対象に書誌を記した。

実践女子大学附属図書館黒川文庫蔵写本〔黒川本〕

【書写年代】江戸中後期。
【装　訂】袋綴。
【巻冊数】二巻二冊。
【寸　法】（上巻）縦二二・九糎、横一六・一糎。（下巻）縦二二・八糎、横一六・一糎。
【表　紙】利休鼠色龍丸散らし表紙。龍丸散らしは、表表紙・裏表紙ともに存するが、上巻は上段、下には下段に位置する。
【料　紙】楮紙。
【外　題】表紙左肩書題簽（縦一七・七糎、横三・七糎）に、「かやくき物語　上（下）」とある。
【内　題】なし。
【丁　数】（上巻）八二丁、（下巻）九九丁、全一八一丁。
【一面行数】一〇行。一行一八字程度。字面高さは、上巻が二〇・一糎、下巻が一九・五糎。和歌は二字下げで始まるが、一字又は三字下げが間々あり、歌末は、地の文にそのまま繋がる形式。
【奥　書】なし。上巻の前見返しに付箋を貼付し「かやくき物語ハ宇津保物かたりの／楼の上の上下なり」と朱書する。
【蔵書印】上下冊の右肩に「物語」（陽朱円形）、一丁オモテ右下に「黒川真頼蔵書」・「黒川真道蔵書」（陽朱長方）、「黒川／真頼」（陽朱円形）。後見返し左下に「実践女子大／学図書館印」（陽朱楕円形）。

実践女子大学附属図書館山岸文庫蔵写本〔山岸本〕

【書写年代】昭和三十三年。

【装　訂】袋綴。

【巻冊数】二巻二冊。

【寸　法】上下巻ともに、縦二七・一糎、横一九・七糎。

【表　紙】紺色表紙。

【料　紙】斐紙。

【外　題】表紙左肩書題簽（縦一八・六糎、横三・三糎）に、「かやくき物語　上（下）」とある。

【内　題】なし。

【丁　数】（上巻）八五丁、（下巻）一〇一丁、全一八六丁（うち遊紙五丁）。

【一面行数】一〇行。一行一八字程度。字面高さは、上巻が二〇・三糎、下巻が一九・二糎。和歌は二字下げで始まるが、一又は三字下げが間々あり、歌末は、地の文にそのまま繋がる形式。

【奥　書】透写本自体の奥書であるが、次の通り。

（上巻）かやくき宇都保国譲巻也吾黒川本書写了
昭和三十三年　薩賓上浣和子写
同　薩賓五月三十一日朝
岸廼舎記之
連日旱天水道枯渇云々
前半主筆校訂有之

（下巻）かやくき物語　下巻　奥書無之、半紙本二冊
国譲
黒川真頼旧蔵書云々　宇都保物語楼上巻之
昭和三十三年十一月三日写了　和子持参焉
同月十日半夜綴了
岸廼舎識
此巻主筆校訂無之云々

【蔵書印】上下巻の表紙右下・前付一丁オモテ右下に、「山岸文庫」（陽朱長方双枠）。奥書丁末の左下に「実践女子大／学図書館蔵」（陽朱楕円形）。

【備　考】黒川本の透写本。奥書の「岸廼舎」は山岸徳平の号。

【2】一五行本

京都大学大学院文学研究科図書館蔵写本〔京大本〕

【書写年代】江戸中期。

【装　訂】袋綴。

【巻冊数】四巻四冊。

【寸　法】四巻ともに、縦二七・九糎、横二一・五糎。

【表　紙】薄茶色縦波刷毛目渋引表紙。その上に、後補の薄茶色表紙がある。

【料　紙】楮紙。

【外　題】中央直書「かやくき一（〜四）」。後補表紙には、左肩双辺書題簽（縦一七・六糎、横四・〇糎）に、「かやくき物語　一（〜四）」とある。

【内　題】なし。

【丁　数】（一巻）二三丁、（二巻）二一丁、（三巻）二八丁、（四巻）二四丁、全九六丁（うち遊紙三丁）。

【一面行数】一五行。一行二六字程度。字面高さは、四巻ともに、二二・三糎。和歌は三字下げで始まるが、歌末は、地の文にそのまま繋がる形式。

【奥　書】なし。後補表紙前見返しの右肩付箋（縦十七・五糎、横五・二糎）に、「宇津保物語「楼の上」の写本也／一、二は上。三、四は下に当る。（下は三、第二枚オ5、一本四ノ始リ二四行有）／三は大原本は一八頁最後の行より、／四は同書は七四頁第十一行より初まる」（割注は、鉛筆書き、その他は朱書）とある。

【蔵書印】一丁オモテ右肩「滋野井文庫」（陽朱長方双枠）、一丁オモテ上「京都／帝国大学／図書之印」（陽朱方）・「235317／大正11 8 7」（陽黒楕円形）、一丁オモテ右下「公麗之印」（陽朱円形）。

【備　考】滋野井公麗の蔵書印より、書写年代の下限は、天明元（一七八一）年と知られる。

以上、書誌を踏まえて、考察を行う。

二、『かやくき物語』の諸本間の関係

まず、『かやくき物語』の諸本の関係を見ていく。【1】一〇行本・【2】一五行本のそれぞれを吟味し、先後関係を推定したい。

一〇行本に関しては、四本とも、改行・改丁・改冊箇所がすべて同じという形態的特徴を有する。さらに、行から一文字だけ左にずれる、一文字分空けるなど、文字の位置まで共通する。すなわち、いずれの本も親本を忠実に書写している。近世期の写本では、親本を忠実に書写するものが多い。書写者には、親本に忠実にあろうとする意識があることを示している。一〇行本には、そのような書写者の態度が表れている。

では、一〇行本間の具体的な関係は、どうであろうか。山岸本は、黒川本の透写本であるため、これを除き、狩野本・慶大本・黒川本、これら三本の関係を考えたい。

例えば、「あらそふ」・「あらかふ」のように、語の別による意味の相違は三本間にはない。よって、この場合、三本の関係性が最も明確に表れているのは、表記である。表記は、派生を考える上で、一助になると考えられる。殊に、一〇行本の場合、親本に忠実に書写しているため、尚のことである。次に掲げる箇所は、そうした表記の違いが、如実に表れている。(4)

ひてはいとうつくしけなるかたへまろにもいふにもみせし思ふやうありとて物し給なるなと聞へ給ていて給ぬ源中納言いらへして帰給とてよそなから車とゝめて見給にけにこのろういといみしき見ものにそあるかしといとらう〳〵しくたゝきてかく聞へちふときねとて

からもりかやとをみんとて玉ほこにめをつけんこそかたは人なる

と思ひ給ふれはまうすきぬるかはらより

（黒川本／下巻一一オ）

傍線が、《黒川本》と《狩野本・慶大本》の間における字母の異同箇所。二重傍線は、仮名の異同箇所である。字母の異同は、黒川本の「曽」「尓」「介」「久」「越」「奴」に対し、それ

ぞれ「所」「丹」「遣」「具」「遠」「怒」である。また、仮名の異同は、黒川本の「ち」に対し、「て」である。字母と仮名、どちらにおいても、狩野本・慶大本の間には、異同はなく、《狩野本・慶大本》と《黒川本》の間にのみ、異同が存在する。

さらに、もう一例掲げる。

とかきつけておき給心ちもいとかなし引あてゝ嶺たに分しこゝろには
もみちのせきをことゝやはせし

かたみに哀におほすとかきりなし犬宮もかへてのことのうへにちりおほひたるを
まろかひくうらやましとやことのうへに
まへてもとはりはつかしとそ思

との給てするゑもの給はぬをかんの殿いかにか猶の給はせよ〳〵とゝかゝるねをひかんとの給はすこのは松風のあらきをとにいと

（黒川本／下巻一六ウ）

字母の異同は、黒川本の「尓」「越」に対し、「丹」「遠」である。字体の異同として四角囲みした箇所は、黒川本の「松」に対し、「衣」である。

また、《黒川本》と《狩野本・慶大本》の間には、漢字・仮名の別がある。その峻別において、狩野本と慶大本は、一致を見せている。

例えば、「さかの院」の「さか」を、《黒川本》では、仮名表記するのに対し、《狩野本・慶大本》では、「嵯峨」と漢字表記する。なお、下巻九〇ウのみ、狩野本・慶大両本ともに漢字表記にしていない。ここでも狩野本と慶大本は、一致を見せる。その他に、漢字・仮名の別に関して、《黒川本》と《狩野本・慶大本》間の異同は、三九オ「昔われとひとし」の「われ」である。《黒川本》が仮名表記するのに対し、《狩野本・慶大本》は、「我」と漢字表記する。

以上、狩野本と慶大本の間には表記の差異が少なく、《黒川本》と《狩野本・慶大本》の間に、差異の甚だしいことを確認できる。このことから、狩野本と慶大本は、近似した本文を有していると分かるが、そのことは、次のような誤写とおぼしい異同からも、裏付けられる。

ことなきを誰にかはかくなしちきりはかりの

（狩野本／下巻二八オ）

ことなきを誰にかなくなしちきりはかりの

（慶大本／同二八オ）

字母で示せば、狩野本「八可久」に対し、慶大本「奈久」である。ここから先後関係は見極め難いが、「八可」と「奈」は、数回の書写を経て、くずし方が似通い、誤写する可能性が起きよう。そのことは、狩野本と慶大本が、直接的な関係にないことも示している。すなわち、「八可」と「奈」の間に、どちらとも判別し得る字を有する写本が、介在していなければ、誤写は起こりえない。

次に、一五行本に関して述べる。前掲の書誌より、一〇行本とは、巻冊・寸法・外題の上で一五行本は異なる。現存本は、京大本のみである。この一五行本の形態が、一〇行本と同様、一五行本の親本をそっくりそのまま写したものであったのか、

あるいは、該本の関係者が、忠実に書写せず、装訂も改めたのか、見極める必要がある。

蔵書印から滋野井公麗が、該本を所持していたことは確かである。書写者も、公麗本人の可能性がある。ただし、該本の筆跡は、行間のないほど、行を詰めた走り書きであり、公麗が書写した他作品の筆跡と比しても、公麗が書写したと判定し難い。

なお、書写者が急いで書写していたことを裏付けるのが、一五行本に存する五つの脱落箇所である。

二所ひきあはせ給て犬宮に［A］さてありかたくていまよりしかをしへ奉りたらん　（京大本／三巻四ウ）

左右と［B］はしまさんさまのよういせんとて　（同／四巻一オ）

右大将まいり給て御はしに御車よせて［C］とある御返うけたまはりぬ　（同／同六オ）

犬宮おろし奉り給右大将いたき［D］ることまたあらしとみえ聞えたり　（同／同七ウ）

内侍のかみになさせ給し御心はへかき［E］なり　（同／同一二ウ）

A～Eの脱落箇所から、ある共通した特徴を見出せる。それは、脱落箇所が、一〇行本の見開き一丁分と一致する、ということである。一〇行本の該当箇所を掲出すると次の通りである。

A　おなしくひかせ～なと聞へ給へは　（黒川本／下巻八ウ～九オ）

B　てろうよりおろす～をも［はんおはし］　（同／同五一ウ～五二ウ）

C　右大殿大納言三～んなしや侍らん　（同／同六一ウ～六二オ）

D　奉り給て木丁の～やうかし給かゝ　（同／同六五ウ～六六オ）

E　りなくむかしの～てかきならしし　（同／同七五ウ～七六ウ）

Bを除き、ちょうど見開き一丁分脱落していることが分かる。すなわち、書写する過程で、紙を急いで捲るあまりに、見開き一丁分を飛ばしたことが、分かるのである。Bは、五二ウ冒頭にあたる「はんおはし」までを欠如する。同様に、見開き一丁分を超え、冒頭箇所も欠如してしまったと見える。

また、一五行本は、目移りによる脱文も複数存在する。そのうち、一〇行本を親本と判断できる最たる例は、次の通りである。

すゝきむら鳥のかたを色々にぬはせ給へり
いとなまめかしくさま〴〵におかしうしりかひにも　（黒川本／上巻六七オ）

ひ給はんほともきかまほしき物かなよになか
らひ給はんほともやすきことさて御ひめ君　（同／下巻二四ウ）

京大本では「すゝきむら鳥のかたを色々におかしうしりかひにも」（二巻一二ウ）、「ひ給はんほともやすきことさて御ひめ君」（三巻一三オ）とあるが、黒川本の傍線部を脱する。一〇行本

を親本とすれば、急いで書写する過程で、目移りによる脱文が起こったと首肯できよう。

このような脱落箇所と目移り[5]から、一五行本は、ある時点で、一〇行本を基に書写していたことが分かる。つまり、『かやくき物語』の諸本は、初めに一〇行本が存在し、後から一五行本ができた、という先後関係が推定されるのである。一五行本という形態は、忠実に改行・改丁・改冊箇所まで一致させて書写したものではない。おそらく、『かやくき物語』の写本を借り、限られた時間の中で書写しなければならないため、急ぐ必要があった。また、蔵書としてふさわしいよう、大本で装訂した、といったところではないだろうか。

以上、『かやくき物語』の諸本の関係を論じてきた。こうした『かやくき物語』の本文は、諸本間で、細かな異同はあるものの、概ね同一の本文であることが分かる。では、『うつほ物語』の諸本と『かやくき物語』は、どのような関係にあるのだろうか。その前提となる『うつほ物語』の諸本とその本文系統に関して、考える必要がある。

三、『うつほ物語』木曽本系統の諸本と特徴

『うつほ物語』の諸本は、前田本・浜田本・木曽本・流布本の四系統に区分される[6]。四系統の関係は、二次共通祖本を同じくし、そこから、各々派生したものである[7]。流布本系統は、脱落や補写、錯簡などがあるものの、前田本系統と浜田本系統の取り合わせであるため、実質はこれを除いた三系統になるだろう。

そのうち、現在、最善本として位置づけられるのが、尊経閣文庫蔵前田家一三行本（通称、前田本）である[8]。この前田本の箱書には、「宇津保物語／慶安四年七月／後水尾天皇所／賜我／黄門利常卿也遂以為家珍焉／正四位下行左近衛中将兼加賀守菅原朝臣／綱紀再拝頓首誌之」と、慶安四（一六五一）年に後水尾天皇が下賜したことが見える。このような箱書から、古態をとどめるものとして位置づけられ、現行の注釈書や論考の大半が、前田本に依拠する。前田本系統の諸本[9]には、毘沙門堂本、桂宮本、無窮会図書館神習文庫蔵本、柏亭本[10]などが挙げられるが、前田本と本文を同じくするのは、毘沙門堂本のみで、他の諸本は巻によっては浜田本系統を有するなど、その系統内でも二分される。

浜田本系統は、木曽本系統と共通する祖本を比較的忠実に書写しようとする態度が見られ、後述の木曽本系統と異なり、校訂作業の痕跡はとどめていない。が、誤写を文意の通るように直したり、異本注記を本行本文に組み込んだりと、少なからず改変の痕跡がある。異本注記は前田本と一致しているものも多い。浜田本系統自体の特徴は乏しい。浜田本を底本とした注釈書は、原田芳起『宇津保物語　上・中・下』（角川文庫、一九六九）のみである。浜田本系統の諸本には、内閣文庫本、彰考館本、紀氏本などが挙げられる。

この三系統のうち、木曽本系統は、中村が系統として立て[11]以降、現在まであまり言及されることのない本文系統であった。「木曽本」という呼称の由来は定かではない。新美哲彦は「近世につくられた校本の校異に木曽本との記載が見えるので

そこからの命名かと思われる」[12]と述べる。これまで明らかとなっているのは、木曽本系統の本文を持つ『うつほ物語』の断簡[13]から、近世前期の三条西家周辺が書写に関わっていたこと。そして、木曽本系統の主な特徴として、諸本すべてに注記、振り仮名、宛字、読点が付され、校訂作業を経た本文であること[14]、である。

現行の注釈書の大半が、前田本を底本とするように、近年の本文研究は、校訂作業を経ておらず、古態をとどめるとされる前田本を、どこまで平安期の様相の本文に近づけて再現できるか、に重きがあるように思われる。しかし、中近世にかけて『うつほ物語』の本文を整定する動きがあった事実を見逃してはならず、その本文をどう整定したかという近世期の享受の側面も考えていく必要があるのではないだろうか。そのために、木曽本系統を精査していくことには意義があると言えよう。

さて、木曽本系統の諸本には、荻野由之本、中村本、蓬左文庫本、久曽神本、岸本由豆流本、岡本文庫本の六本が確認される。このうち、所在の不明である中村本、岸本由豆流本を除いた四本は、他系統と異なる顕著な特徴を共通して有する。それは、朱引による抹消である。この朱引は、楼の上上・下巻で四箇所存する。以下に掲出する。

① 更に取うこかし直すへきにもあらさりけりと見給ふ治部卿はうつほの巻に見えたりそのゝちに大弁しげのゝわらはみこの婿なりしかば　（久曽神本／上巻五三オ）

② 夏のれうのうへの袴きたりとゝは大将殿の御かたなかのおとゝ人々参りあつまれりとりの時也殿の内宮たち殿はら出車し給ゐあつまれり　（同／同八七ウ）

③ たゝの四位五位もいといかめしかねつくりのかこそけこなたのも廿あるを　（同／同八九オ）

④ 大将の御心はへもめつらかにいよ〳〵世になきさまにて親も子をももてなしかしつき給ことゝおほしの給はぬなしつきの巻に女大饗のありさま大法会のことはあめりまするふさの弁のむすめにきんをし給ことなとのこれ○ひとつにてはおほかめれは中よりわけたるなめりと本にとそ侍めれ　（同／下巻一二六ウ～一二七オ）

朱引箇所のうち、①・④は草子地、②は現行の注釈書で絵詞とされる箇所、③は文意不通の箇所である。

通常、朱書された箇所は、後人によるものである。それにもかかわらず、木曽本系統の諸本において、朱引が同一であるのは、何故だろうか。おそらく、親本の朱筆に従い、忠実に写したのであろう。木曽本系統の諸本のうち、岸本由豆流本の存在は、当時の国学者が、少なくとも木曽本系統の写本を有していたことを示している。つまり、国学者たちの間で読まれていた、もしくは研究されていた『うつほ物語』の写本に、校訂作業を経た木曽本系統が含まれていたことを示唆する。そのような木曽本系統と、別物語に仕立てた『かやくき物語』の間に、何か関係はあるのだろうか。具体的に、木曽本系統と『かやくき物語』の関係を述べていきたい。

四、『うつほ物語』木曽本系統と『かやくき物語』

結論から先に言えば、『かやくき物語』は、木曽本系統の本文を基に、本文の整定をした写本である。前節で示した、木曽本系統に共通して有する朱引による抹消部分は、『かやくき物語』では、すべて取り除かれている。以下に掲出する。四角囲みが朱引箇所に該当する。

①′更に取うこかし直すへきにもあらさりけりと見給ふ

イ治部卿は・

そのゝちに大弁しげのゝわらはみこの婿なりしかば　（黒川本／上巻四一オ～四一ウ）

②′夏のれうのうへの袴きたり□殿の内宮たち殿はら出車し給ゐあつまれり　（同／同六八ウ）

③′たゝの四位五位もいといかめし□こなたのも廿あるを　（同／同六九ウ）

④′大将の御心はへもめつらかにいよ〳〵世になきさまにて親も子をももてなしかしつき給ことゝおほしの給はぬなし□　（同／下巻九九ウ）

①′～④′のうち、①′には「イ治部卿は」という異本注記がある。一〇行本は、この異本注記を有するが、本行本文には含めない形で書写する。一五行本には、そもそもこの異本注記がない。

かくして、木曽本系統の朱引による抹消部分は、『かやくき物語』の諸本には存在しないことが確認できる。この本文の整定は、木曽本系統から『かやくき物語』へと、独立した一つの物語に仕立てる上で起こったものと考えられる。仮に、『かやくき物語』を基に、『うつほ物語』木曽本系統の写本に朱引をしたとすると、すべての木曽本にその朱引がなされていることに対して説明がつかない。木曽本系統のうち、どこかの時点で朱引がなされ、書写していく過程で朱引も写されたと考えるのが自然であろう。従って、『かやくき物語』は、『うつほ物語』木曽本系統から楼の上上・下巻を個別の物語として仕立てたと言える。

また、注記の上でも、『うつほ物語』木曽本系統から『かやくき物語』への伝流を考えることができる。『かやくき物語』では、上巻（京大本は一・二巻）に集中して、注記を共通して有する。次の通りである。

《一〇行本》／《一五行本》

①すきやう殿（一ウ）／すきやう殿（一巻・一オ）

②廿四（九ウ）／廿四（同・五オ）

③さうすけして（一八ウ）／さうすかして（同・九ウ）

④ゑんしの中納言（二八ウ）／くゑんしの中納言（同・一四ウ）

⑤そわうの君（二九ウ）／そわうの君（同・一五オ）

⑥きやうこく（三五オ）／きやうこく（同・一七ウ）

⑦しす（三五オ）／しす（同・一八オ）

⑧ くゐんしの君（四〇オ）／くゐんしの君（同・二〇ウ）
源氏

⑨ すゝしの中納言（四三オ）／すゝしの中納言（同・二二オ）
涼

⑩ せうら（四五オ）／せかう（同・二三オ）
浅香

⑪ すれうの（四五オ）／すれうの（同・二三オ）
すはうか　すはうか

⑫ らてん（四五ウ）／らてん（同・二三オ）
螺鈿

⑬ くゐんし（四九オ）／くゐんし（二巻・二ウ）
源氏

⑭ こかむの事（四九ウ）／こかむの事（同・三オ）
公務歟　公務か

⑮ こはのこ（五二ウ）／ごばのご（同・四ウ）
碁盤碁　碁盤碁

⑯ あいきやう（五三オ）／あいきやう（同・五オ）
愛形　愛形

⑰ ふたあゐ（六七オ）／ふたあゐ（同・一二ウ）
藍　藍

⑱ したかさね（六八オ）／したかさね（同・一三オ）
襲　襲

⑲ はし（六八オ）／はし（同・一三オ）
橋　橋

⑳ こせ（七三ウ）／こせ（同・一六オ）
御前　御前

㉑ えはし（七七ウ）／えはし（同・一八オ）
酔

㉒ こよひ（七九オ）／こよひ（同・一九オ）
透垣　透垣

㉓ かうら（八二オ）／かうら（同・二〇ウ）
高欄　高欄

掲げた注記のうち、大半は宛字や振り仮名である。まれに①・⑩・⑭のように、異本注記や、文意不通な箇所に対する注記がある。一五行本は、⑥で、注記が欠けているものの、やはり一〇行本と注記の上でも一致する。

さて、こうした注記は墨書でなされている。そして、一〇行本の場合、①～㉓以外に、朱書された注記が散在している。これは、どのような差異によるものなのか。

木曽本系統である、蓬左文庫本・久曽神本・荻野由之本・岡本文庫本の四本の注記を調べてみると、『かやくき物語』に共通する①～㉓の注記と、すべて一致する。木曽本系統である四本のうち、岡本文庫本に限っては、注記の大半を振り仮名にしているため、一見他本と注記が異なるように思われる。しかし、岡本文庫本も同じである。他本が、仮名表記する本行本文の横に、宛字の注記をするのに対し、岡本文庫本は、宛字の漢字表記に本行本文を改めているのである。従って、他本にある宛字の注記が、岡本文庫本では、本行本文の漢字表記にあたる。そして、岡本文庫本の注記は、宛字の代わりに、振り仮名を施している。だからこそ、他本と注記が異なるように見えるのである。実質的には、木曽本系統の注記は同一と考えてよいだろう。

このような事実から、木曽本系統の諸本に記された注記箇所を、『かやくき物語』は、宛字もしくは振り仮名を中心に取捨選択して、墨書したと考えられる。つまり、本行本文と同様、注記もそのまま木曽本系統の諸本の注記を書き写したのである。

では、一〇行本に見られる朱書の注記は、何か。おそらく、『かやくき物語』の本文を整定し、木曽本系統の諸本にある注記が墨書し、さらに他本との本文異同を横に掲げるために朱書したものであろう。本行本文及び墨書の注記は木曽本系統に拠るが、朱書した注記は、他本との比較において、『かやくき物語』を生成した後に、加えたものと考えられる。その裏付けとなるのが、前掲①の木曽本系統の諸本が有する異本注記である。単に、異本注記のみを色分けしたいのであれば、この①の異本注記も朱書するはずである。しかし、それがなされていないのは、木曽本系統とは異なる注記であることを意味する。そうした峻別意識があったため、①は墨書していると言える。

また、一五行本では、一〇行本にない箇所も墨書している。

ひつらゆひ給へるは（一巻・一四オ）

御ふつくろ（と）より引出て（ふところと同事也）（同・二〇オ）

御ちほしう（乳）（みゆき）幸あるへく（同・六オ）

試みに掲出した四例は、すべて木曽本系統に存在する注記である。一五行本では、一〇行本を親本としながら、その注記の大半を、木曽本系統の注記から摂取している。無論、一〇行本と改行・改丁・改冊箇所も同じ木曽本系統の写本があった可能性はある。が、現存する木曽本系統の諸本には一〇行本と同形態のものはない。そのため、今はその注記を記した人物は、木曽本系統を重んじていたと考えておく他はないだろう。かくして、墨書の注記は、木曽本系統の注記を写したものであり、朱書の注記とは異なることが確認できる。

なお、朱書された異本注記は、一〇行本の諸本の間で、少なからずばらつきはあるものの、概ね一致を見せている。最初に朱書した注記を、前に倣う形で、朱書したと考えられる。朱の異本注記でも、本行本文と同様に、忠実な書写を重んじていたと分かる。

このように、本行本文、注記を吟味すると、初めに『うつほ物語』木曽本系統の諸本があり、そこから派生する形で『かやくき物語』が、本文を整定し、注記を取捨選択して墨書し、他本との異同を異本注記として朱書して成ったと考えられる。やはり、『かやくき物語』が、『うつほ物語』木曽本系統を基に、楼の上上・下巻を独立させて作った、と考えるのが穏当であろう。

おわりに―残された諸問題

かくして、『かやくき物語』の伝来と成立を述べてきた。纏めると、次の通りである。

・『かやくき物語』には一〇行本と一五行本があり、一〇行本を基に書写したのが、一五行本である。

・『かやくき物語』の本文は、『うつほ物語』木曽本系統の朱引箇所を取り除いて、本文を整定している。

・注記は、木曽本系統の諸本にある注記は墨書、『かやくき物語』の生成後に行った注記は朱書である。墨書は大半が宛字および振り仮名。朱書の大半は異本注記である。

・『うつほ物語』木曽本系統から、『かやくき物語』へと伝流した。

早い段階から、『うつほ物語』の木曽本系統が、校訂作業を経ていたことは、既に明らかにされていた。しかし、近世期には、『うつほ物語』のどの本文が用いられていたのか、詳しいことは分かっていない。ある系統の本文に偏重していたのか、あるいは、そうした傾向は特になかったのか、なども詳しいことは定かではない。『かやくき物語』の諸本は、江戸中期に書写されたものばかりで、おそらく成立も江戸中期頃であろうと推察される。本稿では、あえて触れなかったが、最初に『かやくき物語』を誰が生成したのか、という問題がある。おそらく、国学者たちの文化圏の中で生成された可能性はあるだろう。国学者たちの時代の中で、『かやくき物語』が生成された点は、木曽本系統の校訂作業の末の産物であること、木曽本系統が重んじられていたことなど、当時の『うつほ物語』享受の一端を明らかにしている。今後、近世期の『うつほ物語』享受を考える上で、木曽本系統および国学者の文化圏を、さらに精査していく必要があるだろう。

最後に、『かやくき物語』に残された諸問題に関して、触れておきたい。以下の問題は、現時点では不明である。考えられる可能性を提示しておく。

(1) 何故、『うつほ物語』の中から、楼の上上・下巻だけを抽出したか。

まず、何故、『うつほ物語』楼の上上・下巻であるかという点に関しては、『うつほ物語』各巻の独立性が高い点が挙げられる。殊に、楼の上上・下巻は、巻序では最終巻にあたる。琴の伝授と弾琴が物語の中心にあり、他巻の繋がりが希薄な巻という理由が一つ考えられる。

『かやくき物語』のように、『うつほ物語』のある巻を抽出して、個別の物語にしたものには、例えば、『こまの物語』という、吹上上巻を抽出した作品が挙げられる[15]。楼の上上・下巻に限らず、『うつほ物語』は巻の独立性が高いため、抽出のしやすさがあったと言える。

次に、何故、別物語にしたのかという点に関しては、これは一つの可能性でしかないのだが、荒木田麗女が擬古物語を創作していたように、近世期には擬古物語の創作が行われていた。そのような状況下で、『うつほ物語』が他の巻との繋がりが希薄である点を利用し、外題を変えて、個別の物語として仕立てた、と考えられる[16]。そのような考えに至った理由としては、後述する(2)・(3)の問題と関わる。

このように、『うつほ物語』が独立性の高い巻を有する物語であること、楼の上上・下巻が他巻との繋がりが希薄であること、そして、近世期の擬古物語創作の一環という可能性から、『うつほ物語』より抽出され、別物語として仕立てられたのではないだろうか。

(2) 最初に「かやくき物語」と題した人物は、これを『うつほ物語』と認識していたか。

(1)と連動して、個別の物語として「かやくき物語」と題した

人物には、次の二通りが考えられる。

《X》『うつほ物語』と認識して、「かやくき物語」と題した。

《Y》『うつほ物語』と分からずに、「かやくき物語」と題した。

前述のように、『かやくき物語』は、『うつほ物語』木曽本系統を基に、本文を整定している。とすれば、『うつほ物語』と認識していた可能性は高い。《X》である場合、また次の二通りが可能性として挙げられる。

《X_1》読者は『うつほ物語』と分からないだろうから、新しい物語として出した。

《X_2》識者は『うつほ物語』と分かるだろうと認識しながら、新しい物語として出した。

しかし、一方で、《Y》の場合も考え得る。木曽本系統の外題は、「うつほ物語」とは記されず、巻名で記されている。最初に「かやくき物語」と題した人物が、二〇帖揃いの『うつほ物語』木曽本系統を所持している場合、『うつほ物語』と認識するが、仮に楼の上上・下巻しか所持していない場合、認識できなかった可能性も残されている。

(3)『かやくき物語』の書写者たちは、これを『うつほ物語』と認識していたか。

さらに、(2)と連動して、書写者の問題がある。読者である書写者にも、次の二通りが考えられる。

《P》『うつほ物語』と分かって、『うつほ物語』の一部として認識した。

《Q》『うつほ物語』と分からず、新しい物語として認識した。

最初に「かやくき物語」と題して出した際、書写者がどのように認識していたかは、個別に認識が異なるのか、皆認識が同じであったのかも含め、定かではない。

こうした(2)・(3)の問題は、《X》・《Y》・《P》・《Q》の状況が想定されるが、現存する『かやくき物語』一〇行本にある、朱書の異本注記から、《X》・《P》の可能性が高いと考えられる。(2)で述べたように、『うつほ物語』木曽本系統を基に、『かやくき物語』の本文が整定されているので、《X》の可能性は高い。ただし、その場合、所持していた『うつほ物語』の帖数次第で、《Y》の可能性もあり得る。

その点を解決するのが、一〇行本が有する朱書の異本注記であろう。朱書の異本注記は、『うつほ物語』本文をA本、B本、C本…と見て書く必要がある。一〇行本は、前述の通り、本文や墨書がほぼ一致しているため、朱書の異本注記は、『かやくき物語』ではない別の写本、すなわち『うつほ物語』の諸本を見ていたと考えられる。さらに、この場合『うつほ物語』の諸本は、木曽本系統に限らない。木曽本系統の諸本間では、本文の異同が少ないためである。よって、『うつほ物語』の複数の系統本文の写本を見ていることが、この朱書の注記から分かるのである。

また、一〇行本間では、朱書の異本注記の有無が異なる箇所

が存在する。そのことは、注記を付した人物によって、見た『うつほ物語』の諸本が、異なることを示唆する。そして、注記を付した人物はいずれも、『うつほ物語』と認識していたことをも意味する。従って、《P》と考えられる。《P》の場合、『かやくき物語』が識者の間で、行き来するものであったことがうかがえるため、個別の物語に仕立てた人物も、識者であり、《X_2》として創作したことが推察される。いわば〝偽書〟として、『かやくき物語』を生成したことになるだろう。

(1)〜(3)の諸問題は、近世期に『うつほ物語』がどれほど享受されていたかを知る上で、今後考えていくべきものであろう。後考を俟ちたい。

注

（1）以下の引用は、『為忠家後度百首』・『千五百番歌合』が新編国歌大観、『惺窩和歌集』が新編私家集大成に拠る。歌番号も同様である。私に改めた箇所がある。

（2）中村忠行「宇津保物語に関する展観書目録（附解説）」（『日本文学研究叢書　平安朝物語Ⅱ』有精堂、一九七四）参照。なお、伝本に関する詳細な解説は、以下を参照。
片寄正義「宇津保物語傳本考」（『国語国文』七一二、一九三七）
笹淵友一「うつほ物語諸本解題」（西村宗一・笹淵友一編『校本うつほ物語　俊蔭巻』興文社、一九四〇）
吉田幸一「宇津保物語の諸本」（『宇津保物語新論』古典文庫、一九五八）

（3）高橋亨「物語の発端の表現構造」（『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会、一九八七）参照。

（4）本稿で掲出する『うつほ物語』及び『かやくき物語』諸本の本文は、以下の原本・影印に拠る。（　）内は請求記号。

○うつほ物語
久曽神本…久曽神昇『俊景本宇津保物語と研究　資料篇第一〜三巻』（ひたく書房、一九八三〜一九八五）
○かやくき物語
黒川本…実践女子大学附属図書館黒川文庫蔵写本（57）
狩野本…東北大学附属図書館狩野文庫蔵写本（狩/第4門/1139/2冊）
慶大本…慶應義塾大学図書館蔵写本（JL/1A/368〜369）
京大本…京都大学大学院文学研究科図書館蔵写本（国文学/N1/2）

（5）ただし、京大本には、錯簡とも判別し難い箇所が存在する。一〇行本下巻の冒頭「かくてつとめての」が、京大本では三巻冒頭から書写されていない。京大本では、三巻一オ「給かきあはせ給へるほとに」から一ウ「いかゝとものせさせ給へる」まで一丁分書写した後に、二オから一〇行本の下巻冒頭が書写されている。本来の順序に直すと、二オ→二ウ→一オ→一ウ→三オ…が正しい。これが、何によって起こったものであるのか、現時点では明確な解答を持ち合わせていない。

（6）『日本古典文学大辞典』の「うつほ物語」の項において、執筆担当の野口元大が、同分類で四系統とする。

（7）『うつほ物語』の共通祖本及び位置関係に関しては、新美哲彦の一連の論稿がある。以下を参照。なお、a〜cの論稿のうち、現存の『うつほ物語』諸本が、二次共通祖本から派生したことを明らかにしたのはbである。
a　新美哲彦「『うつほ物語』の伝流―幽斎本・三条西家断簡から―」（『平安朝文学研究』復刊九、二〇〇〇）
b　同「『うつほ物語』共通祖本の特質」（『中古文学』六八、二〇〇一）
c　同「『うつほ物語』の諸本―主要四系統の位置関係及び性格―」（『国文学研究』一三七、二〇〇二）

（8）前田本に関しては、注一前掲書の他に、以下を参照。
笹淵友一「前田本宇津保物語解説」（『宇津保物語一』古典文庫、一

中村忠行「前田家十三行本『宇津保物語』その他」（『宇津保物語研究会会報』二、一九六九）

a　室城秀之「前田家本『うつほ物語』はどのような本か」（『物語研究会会報』二八、一九九七）

b　同「『うつほ物語』の注釈・本文」（『国文学』四三―二、一九九八）

（9）『うつほ物語』の諸本の呼称は、注（2）の中村論文に従った。それに示されていない伝本に限り、所蔵先を明記した。

（10）柏亭本に関しては、猪川優子「柏亭本『うつほ物語』（広島大学蔵）の特色〈その一・二・三〉」（『古代中世国文学』一一・一五・一六、一九九八、二〇〇〇・七、二〇〇〇・一二）で異同を含め、紹介がなされている。

（11）注（2）の中村論文参照。

（12）注（7）の新美論文a参照。併せて、注（2）の吉田論文も参照。

（13）注（7）の新美論文a参照。

（14）注（7）の新美論文a、注（8）の室城論文a参照。

（15）『こまのの物語』については、別稿を予定している。『こまのの物語』の資料紹介は、猪川優子「広島大学蔵『こまのの物語』のまやかし―『うつほ物語』伝流過程における一様相―」（『古代中世国文学』一七、二〇〇一）を参照。

（16）注（2）中村論文には、「宇津保の伝本中には「栄華物語」・「続うつほ」・「桂中納言」等、他の書名を冠するものがある」とあり、その例として「かやくき」「かやくき物語」「続うつほ」が挙げられている。『うつほ物語』に別の外題を付すことは、行われていたようである。

【付記】　貴重な資料の利用に際して、東北大学附属図書館、慶應義塾大学図書館、実践女子大学附属図書館、京都大学大学院文学研究科図書館より多大なるご高配を賜った。深謝申し上げる。また、書誌に関して、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の佐々木孝浩先生より数多くのご助言を賜った。記して謝意を申し上げる。